街の座談会 ⑤

若手がのびのび活躍中。七里ガ浜の新しい自治の形って？

どの地域でも停滞気味と言われる自治会活動。そんななかで次々と新しい試みに挑戦する原動力となっているのがこの男たち。彼らの登場で七里ガ浜自治会は未来へと大きく動き出しました。

歴代会長のロビイ活動が結実 若手が集まり始めた時代

――皆さんはどんなきっかけで自治会に関わることになったのですか？

中里　僕は２００６年頃、当時会長だった野崎さんに声をかけられたんです。水野さんとトントンという店に呼ばれてね。それで「頭は使わないけど力仕事なら手伝いますよ」と軽く答えたら、さっそく運動会のテント設置を頼まれて。

水野　ちょうど中里さんが、かえで幼稚園園児の父親たちで、パパスというボランティアグループを立ち上げた頃だよね。（→p31参照）

渡部　なんだかんだ言って彼がこの時代のキーパーソンだったんだね。

安部　僕は２０１２年からそのパパスが

写真左から　奥谷 史彦：現環境対策委員（住民協定管理）、元環境理事　中里 成光：元自治会副会長、元総務理事、元行事体育理事　園部 誠:現顧問、元自治会副会長、元総務理事、元行事体育理事　安部 聖史:現顧問、元行事体育　水野 勝太:元財務理事、元総務理事　渡部 達弘:元行事体育理事、夏祭り永久司会進行　三浦 和則：現行事体育理事

きっかけで理事に加わりました。その気になったとたん、当時会長だった五十嵐さんがやってきて、「さあ、何からやってもらおうか？」と。そんな具合に、あれよという間に巻き込まれていきました（笑）。

水野　そして誘われた人がまた次の人を誘い込む…蟻地獄状態です（笑）。

――こうして、色々なルートで集まった若手が、今や街を動かす中心的存在になっているんですね。

「責任は俺がとる」そんな会長がいたから

――どこの自治会も若手不足という状況の中、みなさんが活躍する理由はどこにあると思いますか？

安部　世代交代ってどこでも問題ですよね。それは上の世代にがんじがらめにされて、若手が動けなくなるからだと言われているんですが、ここは逆に上の世代が僕たちをバックアップしてくれるんです。

水野　２０１４年に〝かもめサポート〟という、街の人が街の人を助ける互助システムを発案したんですが、その時も五十嵐会長が、「責任は俺がとるから好きにやりなさい」と言ってくれて。理事会でのプレゼン時も、「まずはテストケースとしてやってみようよ」と、スルッと議案を通してくれました。

安部　会長や理事が２期４年制を明確にしているのもいいと思う。

中里　自分の仕事との両立という部分では、事務局の存在も大きいよね。イベントの消防や市役所の許可取り、プロパン発注など、平日にしかできない細々とした手続きを引き受けてくれるんです。

園部　特に新米の頃は、何がどこにしまってあるとか、こういうイベントをするなら何の届けを出すなど、基本的なことも面倒がらずに教えてもらいました。

大変なことも笑いに変えて、たくさんのことをカタチに！

――ここ十数年で行なった活躍を具体的に教えていただけますか？

中里　夏祭りはもともと珊瑚礁の亡くなった親父さんの肝入りで始まったんです。自治会と商店会が協力して運営していたそうですが、高齢化もあって、２００８～９年あたりから僕たちが実行委員に加わったの。そこでメインになって動いたのが先ほどのパパスを中心としたメンバーです。

――七里ガ浜名物の「桜祭り」にも歴史がありそうですね。

中里　やはりこちらも自治会と商店会との共催という形で続いていましたが、商店会の高齢化で開催を休止しようかという話まで出た。それでもなんとか続けたいという熱意が勝って、結局僕たちが引き継がせてもらうことになったんです。

水野　あの時は大変だったよね。餅つきの餅はどこで買うとか、ついた後の水はどこに流すのかとか、一から十まで〝理容室ＳＵＮ〟の喜田さんの奥さんに教えを請いながら進めました。みんな自分の妻を差し出して、喜田さんをお姑さんだと思って習ってきてくれって（笑）。

――２０１２年、建築家の奥谷さんが環

境理事になったことを機に、住民協定が整いました。

奥谷　七里ガ浜自治会には、今でこそしっかりとした住民協定がありますが、当時はその時々の理事の考えで厳しくなったり緩くなったりしていたんです。それで、判断基準が曖昧なのは良くないと、一定のルールの元、環境理事が恒久的に管理しようということになったんです。それまで環境の仕事といえば公園管理くらいだったんですが、自ら大変にしちゃいましたね。

防災マニュアルに復興支援、東日本大震災でも実力を発揮

白石徳宏：元防災理事

――災害時には陸の孤島と化す恐れもある七里ガ浜ですが、防災面でも活躍していると聞きました。

水野　防災といえば白石さん。

白石　僕も「防災は楽だよー」と聞いて理事になったんです。ところが、就任した途端に東日本大震災が起きた。その少し前から水野さんと七里ガ浜初の〝防災マニュアル〟づくりに着手はしていたんですが、まさにその矢先でした。さっそく各公園の保管庫の発電機を集めて点検すると、なんと1つも動かない！　慌てて下馬のガソリンスタンドに持ち込んで、直してもらいました。そうやって一生懸命やっているのに、なぜか突然、路上で知らない人に声をかけられ、「お前らにこの街が守れるのか?」って怒られたこともありました。みんなに吊るしあげられてね、それで頑張ったんです。僕の防災人生はあそこから始まったんだな（笑）。

水野　結局、防災マニュアルのパンフレットは2012年に完成。あれは白石さんの自費だったよね。

白石　おかげさまで高く評価してもらって、各地に説明にも出向きました。七里ガ浜自治会ホームページからは5000ダウンロードもされています。ちなみに七里ガ浜小学校を防災のミニ拠点とする「七里ガ浜小学校自主防災委員会」というのもあって、そちらでは水野さんがレジェンド的存在。ここでは近隣の4つの自治会が参加する合同防災訓練などをしています。

――2011年は東日本大震災で桜祭りから急遽復興支援にシフトしました。

中里　その年は僕が桜祭りの実行委員長だったんですが、そんな矢先の震災で、さすがに祭りどころじゃない。それで急遽、復興支援イベントに切り替えたんです。支援プログラムとしては、防災器具の使い方講座や市長を招いての座談会、また箱ティッシュに東北の皆さんへのメッセージを描いて東北に持って行くなど、様々なことを形にしました。市役所駐車場での復興支援イベントは8年経った今でも続いています。

渡部　そんな中で生まれたのが「七七支援隊」。中里、奥谷、田村、渡部が中核になって、七里ガ浜から宮城県七ヶ浜町行きの支援バスを月一で運行したんです。

中里　震災直後の夏祭りでは、グラウンドに子供たちを集めてドッチボールをしたよね。祭り自体を中止するという選択肢もあったのだけれど、こういう時こそ集まって顔を見合うことが大事だと思ったの。結局、夏祭りも例年通りボ

リュームを落とさずやり遂げました。

自治会活動は友達作りの場。知り合いの少ない人こそ繋がりを

――この他にも、園部さんの総務理事時代には自治会ホームページを立ち上げ、2017年にはリレーでギネス記録樹立。水野さんのかもめサポート、中里さんのアスリート国際交流プログラムなど、様々なプロジェクトを成功させています。こういった活動を次世代に繋ぐためにも、さらに若手理事を増やしたいところですね。

三浦　夏祭りや桜祭りなど楽しいイベントを入り口にして、そのまま自治会活動を続けてもらえたらいいですね。でも子供が小さいうちは難しいかな。

園部　うちは子供が僕にくっついて自治会館に来るのを楽しんでいたよ。先に子供同士が友達になって、そこから大人も横の繋がりができ、さらに上の先輩方へと広がった。都内で働いていると、どうしても地域の繋がりが希薄になりがちだけど、自治会活動のおかげでしっかり根を張って街に馴染むことができた。実はまだ住んで7年なんですが30年くらい住んでいるみたいだって言われます。

安部　僕も引っ越してきたばかりの頃は知り合いもいなくて、それで自治会に入りました。こういう活動って街のためになるだけでなく、自分や家族にとってもいいんじゃないかな。

水野　せっかく七里ガ浜に来たら、街と関わりをもった方が楽しいですからね。

グループホームにシャトルバス…面白いアイディアが次々と

――七里ガ浜の未来をどんな風に変えていきたいですか？

水野　僕たち世代が高齢になった時期を目指してグループホームみたいなものを作りたい。広い家に一人ずつ住むより、シェアハウスみたいにみんなで住んだら楽しいし、きっと便利だと思うんです。

渡部　僕は、何しろ子供たちがきゃっきゃ言っている街にしたいな。

水野　塾帰りの子供や仕事帰りの人を乗せる〝七里ガ浜シャトルバス〟みたいなものを出すのもいい。就職して東京で働き出すと、ここまで帰ってくるのがしんどくなるでしょ。七里ガ浜でずっと暮らせるようにするにはそういうことも大事。

行政に頼らない〝自治の王国〟を目指そう！

中里　行政に頼らずに七里ガ浜内ですべてまかなう独立王国を目指すのはどう？「自治の王国」プロジェクト立ち上げて。こういうのって、面白いことをやろうと思っている人がいっぱいいるからこそできるんだよね。規格外の人がたくさんいる七里ガ浜、これからもさらに面白くなっていくんじゃないかな！